

金子直吉大人命二十年祭祝詞

生田神社権宮司 福田義文

是のオリエンタルホテルの一室を暫し祭庭と設け、招き奉りませ奉る、故鈴木商店大番頭金子直吉大人命の前に、齋主生田神社神職福田義文、謹み敬いも告げ奉らしくは、あわれ汝大人命はしも、慶応二年六月十三日山高く、流れも清き高知県名野川村に生れ出で、幼き頃よりいとも貧しかりし父母の家業を助け、十二才にして高知市の長尾砂糖屋の丁稚となり、十五才の年には質屋に務めつつ、孫子の書を始め諸々の書の林に深く別け入り、人と成り、明治十九年二十一才の春には、兼ねて望み給ひし、憧がれの神戸栄町四丁目なる鈴木商店に入り、柳田富士松の君と共に力を合せ、主人鈴木よね刀自を輔け給ひ、明治三十三年、三十五才の春には、妻君徳刀自

をむかえ給ひて、妹背の契も固く家のなりを修め、商の道も次々に広め給ひ、自から台湾に赴きて樟腦の業を起し、明治三十六年には大里製糖所を創立、次で明治三十八年には小林製鋼所を買い受け給ひてよりは、金属製煉、科学工業、造船、船舶、鉄道、人絹、毛織、セルロイド、染料、製糖、製塩、製粉、製油、窒素肥料、ゴム、薄荷、酒類、マッチ、煙草等に至る五十数社に及ぶ産業に手を伸ばし給ひ、日清、日露の戦いより、第一次世界大戦と、烈しく動く経済界の浪に乗りて、その止まる処なき迄に、立榮えしめ給ひしは汝命の秀でて、すぐれたる商の功と称え奉る可き事にこそ。さはあれども汝命達が嘗々と築き上げ給ひし多数の会社工場の営業も大戦争おさまり

て、世界の動きにわかに吹き変り、荒き波風打ち寄せて、米騒動、関東大震災、金融恐慌等次々に起りて、昭和二年、汝大人命六十二才の年、遂にせむ術もなく力及ばず鈴木商店の灯が悉く打消されしは、いとも口惜しき極みなり。

アルミナ製造計画のいみじき志を立てつつも、病重くなり、御子達を始め親しき人達の誠心の看護の甲斐もなく二月二十七日未明、七十九才をこの世の限りとも去り給ひぬ。

是を持ちて、汝命、如何にもして元のうるわしき「辰」を起し奉らむと、千々に心を碎き給ひ、昭和三年、山陰の海潮温泉にて「落武者の世を遁れたる炬燵哉」と又昭和五年高野山に詣で、「敗残の我恥かしき青葉哉」又「影になり日向になりぬ冬木立」昭和六年の元旦には「初夢や太閤秀吉那翁」等詠み給ひし其の折々の感懐の中にも、いつかは立ちいでむ折を伺い給ひしも、事志と違ひ、意の如く成らず、日支事変、大東亜戦争と弥々進みて、己己の暮しも日にけに乏しく、苦しき事のみ多き、昭和十八年夏、東京に上京中風邪の病にかかり神戸御影掛田の我家に帰り給ひて後も、次第にみ体衰え、翌年二月病の床にありながら、北ボルネオのセメント、サラワックの

汝命去り給ひし翌年八月日本も戦に破れ、国中の産業も大方荒野と変り果てし中に、汝命が明治、大正、昭和の永き年月、多数の人達をねむごころに教え導き給ひし甲斐も著しく、桜花の如く、散り散りになり給ひし、鈴木商店の元社員も、又書生なりし人達も、次々に志を立て、勤め励み給ひて己己の会社の営業も次第に立ち榮え行くにつけても、先思い出さるるは、これは専ら、汝大人命の高く尊き教えによる事と、大人を慕う心の弥増さりて、昭和二十五年には、六甲山の麓に金子直吉翁、柳田富士松翁の頌徳碑を建て、同年金子、柳田両翁の伝記を編集し、後には松方、金子物語も世に現われ、又辰巳会と言う会をも起し、年々に会合を開き、鈴木商店の昔を忍のび、「商人は物品の評価人であれ」「事業と商売は

常に身を十字街頭に置き」と激しく論じ給ひし事もあり、或時は慈愛に満ちて、居間の仏像を語り給ひし事もありしと、過ぎ来し方をそぞろに偲び奉るまにまに、汝命み去り給ひしより、早や二十年の年月は流れ来ぬ。

ここをもちて、今日しもみ魂祭り仕へ奉らくと、辰巳会会長高畑誠一大人を始め、ゆかりも深き諸人達、これの処に参き集ひ、礼代の御食御酒をはじめ、在りませし日に好み給ひし、葡萄酒、亀の子煎餅、金平糖、干柿、リンゴ、焼栗、バナナ、洋食に至るまで供へ奉り、ゆらとゆらぐ灯火の彼方に、汝大人命が、家柄も学歴も権力もなき身を持ちながら、国のため、世のためと、烈しき商魂唯一筋にS Z Kの「辰」の旗標を七つの海原になびかせ、三井、三菱と相並びて、国中は申さくも更なり世界の国々と貿易を交し給ひし、雄々しき男意気を諸共に称え奉り、又命は今の現にはなく、懐しき土佐弁の声を聞く由もなければ、汝命の導き給ひし商の道は、神戸製鋼、帝人、播磨造船、豊年製油、日商、太陽鉱工等

多数のいみじき会社の人達に引継がれ、其の人等の心の中に、今も今も赤々と燃え続けて、人の心を振り起さしめ、又家に在りては、長男文蔵主は今も太陽鉱工に務め給ひ、次男武蔵主は東京大学教授文学博士と勤み給ひ、須磨子の君も家の政を修め、又多数の孫達も、それぞれにすくすくと育ち給ひて、こよなき父なりき、やさしき祖父なりきと慕ひ給うことども、己れ神職おぢなけれども、たどたどしくも汝大人命の一生の立てたまひ、遺し給ひし其の大よそを告奉る状を幽世ながらにあな嬉し、あな楽しと、御心安らに受け給へと、謹み敬ひも拝み奉らくと申す。

(昭和三十九年二月二十七日執行)

諸共にみ魂をしたふ真心を

幽世ながら亨け給ふらむ

義文

旅の名残り

岡田 静子

昭和六十二年六月五日より四泊五日の、奥の細道の旅に参加した。桜井武次郎先生引率のもと五十名であった。大阪空港九時十分発仙台空港十一時五分着。バスで名取市道祖神の社に詣る。立派な神社であった。平安中期の歌人、藤中将実方が下馬の立札を無視して社を過ぎんとして落馬死す。その塚が道祖神の境内を出て、田の畝道を行くと、立札に、かた見の薄、実方の塚とあり、塚に寄り添う如く一群の薄がある。かた見の薄とは、葉が開かず、とくさの様な形して丸く細長く、緑豊かなれど悲しげに思われた。五月雨のぬかり道で、芭蕉はかた見の薄を見に行けなかった。昼食後松島に行く。芭蕉は出発の時「三里の灸をすうるより、松島の月、先、心にかか

りて」とあり、松島の景を思いうかべていたのであろう。松島の遊覧船に乗りて巡る。大小様々の多くの島々ありて、湾内晴れ渡り、洞穴を三つも連ねた島あり、いづれの島も松の緑あざやかに、さすが天然の美、日本三景の一である。芭蕉は、「造化の天工いづれの人か筆をふるい詞を盡さん」と書いている。芭蕉は松島のとある宿に一泊し、二階へ招かれ、「月海にうつりて昼のながめ又あらたむ。風雲の中に旅寝することあやしきまでに妙なる心地はせらるれ」と認め、「松島やあ、松島や松島や」と感歎の言葉をのべたのみにて句は詠まなかった。松島や鶴に身をかれほと、ぎすの一句がある。

六月七日尿前の関跡を過ぎ、堺田の封人(ほうじん)の家を見学する。芭蕉は風雨あれて封人の家に二泊三日を過ごす。封人の家とは国境を守る人の家のことで、こゝでは仙台境を接する新庄領堺田の庄屋、有路家であるといわれている。仙台領尿前の関を越え出羽の国へ旅路を急いだが日暮れ頃となり、封人の家に宿りを求めた。雨のため、二泊三日を封人の家に過ごしたのである。この建物は本来東北部に見られた広間型民家の代表的なもので茅葺である。昭和四十四年十二月重要文化財として、国の指定を受けた町有建造物である。向かって左側に玄関、中央に入口、右側に大戸口がある。床の間(床の間のあるざしき)いりのざしき、なかざしき、こざしき、なんど、囲炉裏のある広い部屋がある。広い土間には、かまど、水屋(炊事場)、馬屋が三つあり、有路家は永くこの家に住んで、代々の庄屋

で当主は十五代と伝えられている。約三百年の歴史を經ていると推定され、いわゆる、村役場としての性格をもち、更に問屋や旅館の機能をもそなえた国境の庄屋家屋にふさわしい構えといえる。一同は座敷に上つて拝見した。部屋の境、押入等の障子、襖は、はずされ広々と風通しがよかつた。一般の旅人は、右の入口、大戸口からは馬が、そして、武士、名人、大商人等は左の玄関からはいったそうだ。宿に泊る時は、先ず笠を宿の人に預けて座敷に上がったそうだ。昔の旅人にとって笠は重要な役をしていたと、桜井武次郎先生より教えられた。私は座敷を出て土間を通り、裏口に出してみた。山水を寛から流して炊事場に流れ込む様にされていて、裏庭に草木はなく、広々として、物干場などに使われていたと思つた。庭の一隅に濃紫の鉄線花が咲いていて、旅情をなぐさめられた。